

## わたしの原風景

4

山本悦子

やまもと えつこ / 児童文学作家



イラスト／石川えりこ

子どもの頃、となりにいとこ姉妹が住んでいた。一人はわたしより二つ上、もう一人は一つ下。幼年期、このいとこたちと遊んでいた記憶が最も鮮明だ。どちらの母親も仕事をしていたので、いつも子どもだけで遊んでいた。わたしには五歳上の姉もいるのだが、姉は一足早くチビ軍団を卒業し、わたしたちに「こんな遊びがあるよ」と教える参謀的な役割だった。わたしたちは、姉から伝授された遊びに工夫を重ね、より楽しい遊びを生み出すことに余念がなかった。例えば、紙コップで糸電話を作れることを教えてもらうと、となりの二階の窓とうちの二階の窓に糸電話を通した。さらに、その糸に滑車を貼り付けた箱を設置しおかしを運んだ。カレンダーの裏で王冠を作り、風呂敷を体に巻き付け舞踏会、こっこもした。風呂敷はときにはマントに早変わりし「リボンの騎士こっこ」になった。「サファイア王子」が三人なのはまずいので「エメラルド王子」と「ダイヤモンド王子」もいた。裏の家の柿の木にロープを縛りつけ、ブランコを作った。もちろん木には登り放題だ。おふるの炊き付け用の木をくきで打ち付け、鳥の巣箱を作り、よその家の木にかけてきたこともある。どの虫が泳ぎがうまいか「虫の水泳大会」もした。秘密基地では、拾った犬や猫を飼った。近所の人も危ないことをしない限りは、怒ったりはしなかった。大らかな時代だった。

上のいとこが中学に入り、一気に一緒にいる時間が減った。下のいとこも徐々にいっしょに遊ばなくなった。わたし自身も同級生といることが多くなった。五年生の秋だったと思う。ふと思いつき、一人で裏の家の柿の木に登った。その頃には、もうブランコも外されていた。多分こっこが、体重を支えてくれる限界だろうと思われる枝に立ち、西の空を見ると、夕日が揺れながら落ちていくところだった。今までだって、美しい夕日は何度も見てきた。なのに、胸の奥が苦しくなると、気がつくとも涙があふれた。多分、それが、わたしの子ども時代の終わりの日だったのだと思う。